アカデミズムと文章を書くこと

河西瑛里子

1　はじめに

「文章を書く」ことを生業とする職業はいくつもありますが、研究者もその１つです。分野によって、スタイルは多様ですが、書くことに変わりはありません。私は文化人類学を専攻しています。文化人類学者は自分が決めたテーマを深められる場所（フィールド）に行き、参与観察やインタビューを行ってデータを集めます（行きたい地域がまずあり、そこで可能なテーマを探すこともよくあるのですが……）。帰宅後、集めたデータを整理し、これまでの研究者たちがそのテーマや地域について明らかにしてきたこととの違いを検討し、文章にします。文化人類学ではフィールドワークに基づくデータの記述を「民族誌（エスノグラフィー）」と呼びますが、この手法はビジネスやマーケティングの分野では調査方法として応用されています。

「エスノグラフィーとフィクション研究会」代表の林真さんより、『ラウンド・アバウト』[1]というエッセイ集に収められた拙論[2]や、博士論文をもとにした拙著『グラストンベリーの女神たち』[3]の語り口に関心をもっているとの連絡いただいた時、正直言って、驚きました。私はフィールドワーク中に経験したことを、読み手が思わず笑ってくれればと願いつつ、書き込むことが時々あります。そういった学術論文は口語的だと批判されたり、書き直しを勧められたりすることはあっても、評価されることはほとんどありません。文化人類学では『文化を書く』[4]が出版されて以降、民族誌には客観的事実が描かれているわけではなく、意識的にせよ、無意識のうちにせよ、著者が書く内容を取捨選択してきたことが明らかにされ、記述の仕方についての議論が続いています。しかし私は、『文化を書く』に触発された、実験的な民族誌を目指そうとしたなどの強い思いをもっているわけではありません。以下では、アカデミズムと文章表現、及び研究会でコメンテーターをしていただいた横道誠先生からの質問に対する返答について、記していきます。

2　主観や感覚の記述と文化人類学

文化人類学の民族誌は、序論と結論として、理論的、哲学的な話があり、その間にフィールドで見聞きしてきたデータが入ります。サンドイッチでいえばパンに当たる、初めと終わりの理論部分が大事とされ、一番読まれるらしいのですが、大学院入学後、民族誌を色々読み始めてから

---

[1] 神本秀爾・岡本圭史編。2019 年、『ラウンド・アバウト――フィールドという交差点』集広舎。
[2] 「フィールドの常識は非常識？　異文化と身体接触」（pp.51–59）、「女性の身体の再聖化――「ヨニ」の称賛とフェミニズム」（pp.230–240）。
[3] 2015 年、『グラストンベリーの女神たち――イギリスのオルタナティヴ・スピリチュアリティの民族誌』法蔵館。
[4] ジェイムズ・クリフォード＆ジョージ・マーカス。1996 年、紀伊國屋書店（1986 年、英語版第一刷刊行）。

思ったのは、「最初と最後の、よくわかんない難しい部分、これ何？」でした。サンドイッチでいえば具に当たるフィールドでの体験はわかりやすいのですが、面白いものばかりではなく、堅苦しいのもありました。

アカデミックの世界の新参者だった当時の私は、（おこがましいことに！）民族誌が一般的な基準で言うと「難しい」ことを非常に勿体なく感じていました。フィールドから帰ってきた人たちのゼミ発表は、一つひとつのエピソードがすごく面白いのですが、学術論文になると、鮮やかさを失うというか、言葉が難しくて、それゆえに面白味が褪せているのです[5]。その理論的な部分こそ、面白いんだと聞かされても、その境地には到達できませんでした。

と同時に、学術論文も含め、文章はわかりやすくあるべきだと、いつも考えていたことも事実です。家族の仕事の関係で、子供の頃は全国紙を 4 紙とっていたため、リビングルームにはいつも新聞が山積みになっていました。つまり、とりあえず手を伸ばしたところにある文章は新聞記事、という環境で育ったといえます。日本の新聞記事の多くは、おそらく日本の高校を卒業していれば、読める程度のわかりやすさで書かれていると思います。抽象的な用語の使用頻度はそれほど高くないし、使われている時には解説があるし、著名な作家やエッセイストの記事でも読みやすいものが多いです。難解な文章になじめず、わかりやすい文章が好きなのは、新聞に囲まれて育ったせいかもしれません。

コメンテーターからの質問の 1 つに、影響を受けた作家はいますか、というものがありました。高校の国語便覧に載っているような近代文学の作家を挙げられたら恰好いいのですが、彼らの作品は大抵、読んでも皮膚に染み込まないというか、弾いてしまう感じなのです。ですが、話の展開の仕方という点では、ワシントン・アーヴィングの『アルハンブラ物語』[6]と米原万里の『嘘つきアーニャの真っ赤な真実』[7]が印象に残っています。前者は、スペインのアルハンブラ宮殿に滞在していたアメリカ人の著者が、現実と伝説を織り交ぜながら綴っています。後者は、子供時代の記憶と同級生と再会する現在が、相互に語られていきます。そのどちらも、現実と伝説、現在と過去の切り替わりの境目があやふやで、気づいたら伝説／過去に飛び、いつの間にか現実／現在に戻ってきているのです。朝方、ベッドの中でまどろみながら、夢と覚醒の間を彷徨っているような心持ちです。

それから、児童文学はわりと好きで、アーサー・ランサム（1884–1967）、ミヒャエル・エンデ（1929–1995）、アストリッド・リンドグレーン（1907–2002）、ヨースタイン・ゴルデル（1952–）といった作家が好きでした。アーサー・ランサムはイギリスの湖水地方を舞台にして、子供たちがボートに乗って遊ぶ『ツバメ号とアマゾン号』のシリーズ[8]、ミヒャエル・エンデは『モモ』[9]や『はてしない物語』[10]といった作品で知られています。アストリッド・リンドグレー

---

[5] 当時、ゼミで発表されていた方々と、私がこの頃に読んでいた学術論文の著者は重なりません。
[6] 1997 年、日本語版新訳第一刷刊行、岩波書店。
[7] 2001 年、初版刊行、角川書店。
[8] 1967 年、日本語版第一刷刊行、岩波書店。シリーズは全 12 作品。
[9] 1976 年、日本語版第一刷刊行、岩波書店。
[10] 1982 年、日本語版第一刷刊行、岩波書店。

ンは『長くつ下のピッピ』[11]、ヨースタイン・ゴルデルは『ソフィーの世界』[12]が一番有名ですが、それ以外の翻訳もあります[13]。『ナルニア国物語』[14]『ドリトル先生』[15]『オズの魔法使い』[16]のシリーズも印象に残っています。日本の作品としては、1994 年に第 1 巻が刊行され、2017 年に第 12 巻をもって完結した『こそあどの森の物語』[17]を挙げたいです。小学生向けなのに、なぜか通っていた中学校の図書室に入っていたので、手に取ったのですが、ポアポアという名前の実やウニマルと名付けられた変わった形の家など、登場する事物のディテールが面白くて、その頃の友達とそれをもとに言葉遊びのような話をしていた記憶があります。

20 歳頃までに読んだ中で影響を受けた書籍を挙げてみたのですが、別世界のような世界が描かれているものばかりですね。私はイギリスのグラストンベリーという町をフィールドとして調査をしてきたのですが、ここにはスピリチュアリティやニューエイジといった事柄、いわば精神世界に関心がある人が多く集まっているため、ちょっと浮世離れした会話をよく耳にします。私にとってはリアルな別世界なのですが、拙文におけるグラストンベリーという世界の描き方は、上記のような作品に影響されているのかもしれません。

でも、文章という点で、確実に影響を受けた作家は、梨木香歩です（映画化された『西の魔女が死んだ』[18]が有名ですが、小説のほか、エッセイや絵本も刊行されています）。ただし正確に書くと、「影響を受けた」のではなく、影響を受けたいけれど、そんなレベルに達することはないと落胆するほど、その表現の鋭さにはいつも衝撃を受けてしまう作家、となります。何か月も日本語と接することがないような長期調査に行く時、日本語の感覚を忘れないように、彼女の作品を持っていくこともあります。ストーリー展開の面白さはもちろんなのですが、一文、一文が、すごく丁寧に書かれている気がします。短い表現で、その場の雰囲気や感覚、人の感情が的確に表されているのです。具体例として、もっとも印象に残っている『裏庭』[19]という小説の一説を紹介しましょう。

> でも、その日はしとしとと、音もなく小雨の降る日で、ほら、そんな日は人と人との距離がとても短くなるものだ。気を付けなければならない。（文庫版 p.13）

静かな雨が降る日、1 人で外を歩いていたり、窓の側にいたりすると、昼間であっても何かがそっと近づいてくる気配を感じませんか？　本書のあらすじは省略しますが、この「気を付けなけ

---

[11] 1964 年、日本語版第一刷刊行、岩波書店。続きとして『ピッピ、船に乗る』（1965 年）と『ピッピ、南の島へ』（1965 年）があります。
[12] 1995 年、日本語版第一刷刊行、NHK 出版。
[13] その他に 11 作品、翻訳されていますが、『カードミステリー』（1996 年、徳間書店）と『アドヴェント・カレンダー』（1996 年、NHK 出版）は、特に好きでした。
[14] C. S. ルイス、1985–86 年、日本語版第一刷刊行、岩波書店。シリーズは全 7 作品。
[15] ヒュー・ロフティング、1951–79 年、日本語版第一刷刊行、岩波書店。
[16] ライマン・フランク・ボーム、1974–94 年、日本語版第一刷刊行、早川書房。シリーズは全 14 作品。
[17] 岡田淳、1994–2017 年、初版刊行、理論社。
[18] 1994 年、初版刊行、楡出版。1996 年、新装版、小学館。2001 年、文庫本、新潮社。
[19] 1996 年、初版刊行、理論社。2000 年、文庫本、新潮社。

ればならない」という一文を目にしたとき、文章が飛びぬけて上手な人は目に見えないものや身体的な感覚を一言で書き表せるのだと思いました。彼女の作品を読むたびに、言語では掴みとりにくいけれど、私たちの周囲に確実にある事柄の表し方の巧みさに感服しています。

話を民族誌に戻しますと、大学院に入った頃は、新聞と児童文学以外、ほとんど読んだことがなく、学術書というものが世の中に存在していることすら、よくわかっていません。そのため、学術書を本格的に目にするようになると、見慣れない文章のスタイルに大いに戸惑わされました。しばらくの間は、こういう難しいことを書く人もいるんだと、他人事のように捉えていましたが、博士課程の 3 年目、フィールドワーク中の自室で学術書を読んでいたとき、こういうものを書かないと博士論文の審査に通らないんだと突然気づいて、目の前が真っ暗になったことをよく覚えています。

それでも、文化人類学ではほとんどの論文で著者の主観的な体験や思いを記述していると思います。客観的な民族誌の記述が不可能という指摘への対応の一環といえます。この点は、他の研究分野からは異質に見えるかもしれません。たとえば私の博士論文の査読者の 1 人は 19 世紀の英文学の研究者だったのですが、論文とは客観的で論理的な文章であるはずなのに、私の博士論文は主観を取り入れすぎているという指摘を、公聴会の場でいただきました。それに対して、文化人類学を専門とする他の査読者が応酬を始めたのです。私が反論する間もなくです。つまり、多かれ少なかれ記述に主観を取り入れることは、文化人類学においては、普通のことだと言えます。

拙著『グラストンベリーの女神たち』の中でも、この件には少し触れたのですが、学術書にしてはわかりやすい語り口にしたのは、民族誌の記述についての議論に一石を投じたいという野心よりは、抽象度を高めて読者を限定することを避け、より多くの人々に開かれた作品にしたかったからです。予想外に嬉しかったのは、拙著を読んでくれた後輩が、「あんな感じでも博論、通るんですね」と言ってくれたことでした。

研究会で取り上げていただいた『ラウンド・アバウト』という書籍は、いわゆる学問からははみだすような事柄を積極的に出していこうとしたところが画期的な試みだったのではないでしょうか。編者からは文化人類学を専攻するわけではない大学生や、関心がある一般の方に向けた書籍であるため、フィールドワーク中に最も印象的だったエピソードを取り上げてほしいと頼まれました。調査時に出会った人々や出来事をつらつらと思い出していく中で、一番印象的だったシーンは、女神運動[20]の儀式の中で女性性器を見せられたことだったので、「女性の身体の再聖化――「ヨニ」の称賛とフェミニズム」として取り上げました。キスとハグをテーマとした「フィールドの常識は非常識？　異文化と身体接触」ですが、私がフィールドにしたグラストンベリーはイギリスなので、アフリカなどに比べるとカルチャー・ショックを覚える機会が圧倒的に少ないんですね。その中で何かないかと記憶を辿り、見つけ出したのが、頻繁に起こる、抱きしめ

[20] 女神運動とは、キリスト教に虐げられてきた女性たちには、男神（God）ではなく、女神（Goddess）が必要だとして、1970 年代の北米で、フェミニストたちが創り出した信仰です。月経や妊娠のある女性の身体を女神とみなすことで、汚らわしいのではなく、聖らかだと訴えました。私はイギリスのグラストンベリーで始まった女神運動について、長年調査をしていました。

られるというか、身体を触られる経験でした。

エッセイの詳細は省きますが、どちらも感覚的な事柄を書いています。その後、前者の儀式に関連して、女神を身体に降ろすことに焦点を当てた論文を書きました[21]。変性意識状態や踊りを通して得られる、非日常的な実践や感覚が女神を想起させ、女神の存在を認識させられているのではないかと考えたのです。また、『現代世界の呪術』[22]を通して、呪術があるものとみなされていく過程で、人々が得ている感覚が近年注目されていること、感覚に注目した人類学の分野があることを知りました。さらに「参与観察」ならぬ「参与感覚 participant sensation」[23]が提唱され、対象社会に入り込むことで育まれる調査者自身の感覚を調査ツールとして活用することが提案されていました（p.375, 377）。

自分自身の身体が体験していない感覚を、読み手に文字だけで理解してもらうことは難しいのではないか、と思うことがあります[24]。だから、書き手が体験した感覚的な事柄について記述し、それを読んだ読み手が、経験済みの身体的な感覚を追体験できるようなことが生じれば、民族誌の新しい可能性のようなものを提案できるかもしれません。

3　突飛な世界観の構築と信仰

『文化を書く』が明らかにしたことは、民族誌のもつフィクション性ではなかったでしょうか。フィクションに関連する質問３点を考えてみます。

まず、グラストンベリーの女神運動をヴァナキュラー宗教（土地固有の、必ずしも本流ではない）と見なせるのかという問いをいただきましたが、実際そのように言われています。1990 年代からグラストンベリーを調査しているイギリスの宗教学者のマリオン・ボウマン（Marion Bowman）は、もともとフォークロアを専攻していて、女神運動だけではなく、グラストンベリーに見られる様々な言説をヴァナキュラー宗教だとする論文をいくつか発表しています[25]。この視点からの研究は彼女のテーマと思っているので、私自身はそういった視点から取り組もうと思ったことはありませんが、グラストンベリーやイギリス、アイルランド等に伝わる、いくつもの伝説を利用して、女神の体系を創っており、女神運動はヴァナキュラー宗教だと思います。

ここにフェイクロアやフォークロリズムの要素を見ることができるか聞かれると、女神運動

---

[21] 河西瑛里子。2021 年（刊行予定）、「私は女神だ！ 欧米の女神運動における女性と身体」『官能の人類学』（石井美保・岩谷彩子・金谷美和編）ナカニシヤ出版、ページ数未定。

[22] 川田牧人・白川千尋・飯田卓編。2020 年、『現代世界の呪術――文化人類学的探究』春風社。

[23] Howes, David 2013 “The Social Life of the Senses,” *Ars Vivendi Journal* 3: pp. 4–23.

[24] ある方から、大麻を吸ったことがない人は、変性意識状態が感覚的にわからないから、そこに到達できないが、大麻を吸った経験があれば、吸わずとも変性意識状態にもっていくことができると伺いました。これは大麻の吸引が合法的な地域での経験であり、筆者自身の経験ではないですし、今後もそのような予定はありません。

[25] たとえば、2000 “More of the Same? Christianity, Vernacular Religion and Alternative Spirituality in Glastonbury,” in Steven Sutcliffe and Marion Bowman (eds.), *Beyond New Age: Exploring Alternative Spirituality*, Edinburgh: Edinburgh University Press, pp.83–104 や 2003–2004 “Taking Stories Seriously: Vernacular Religion, Contemporary Spirituality and the Myth of Jesus in Glastonbury,” *Temenos* 115(3): pp. 125–142.

は古代に女神を崇拝する文化があったとしているので、捏造といえば捏造ですが、捏造している文化が何万年も前の文化を現代風に蘇らせている、文化そのものではなくてエッセンスのようなものを蘇らせている、という立ち位置なので、当時の文化そのものではないことは皆が知っています。そう考えると、フェイクロアとまでは言えないかもしれません。しかし、フォークロリズムではあるかもしれません。グラストンベリーの女神運動では、アーサー王伝説に登場するモーガン・ル・フェイという女性を女神のように位置づけている様子が見られます。魔法を使える彼女はアーサーの義姉で、義弟をだまして息子をもうけ、アーサー王は長じた息子との戦いに破れます。そのため、モーガンは悪女として描かれることが多いのですが、アメリカの小説家マリオン・ジンマー・ブラッドリーは、モーガンの視点からアーサー王伝説を解釈しなおして、『アヴァロンの霧』[26]という小説を発表しました。この小説にグラストンベリーで女神運動を始めた女性は影響され、モーガンが神格化されたようです。ただし、一般に流布している伝説中のモーガン・ル・フェイは妖精です。私は妖精を神として崇めることにそれほどの違和感はないのですが、キリスト教の価値観に基づき、奇妙に思う人もいるようです。モーガン以外にも女神として設定されているケルト伝説の登場人物もいます。妖精や伝説上の人物を女神としてしまうという意味で、グラストンベリーの女神運動はフォークロリズムといえます。

次に、10 代の私がオウム真理教の事件をどう受け止めていたか、です。毒ガスのサリンが撒かれた路線の 1 つが自宅の最寄り駅とつながっていたことと、事件の少し後、教団の本拠地があった上九一色村周辺に林間学校に行ったこと、子供の頃、近所の大学の学園祭で教祖が講演していたことなど、オウム真理教という存在は、まったくの別世界ではなく、自分自身の日常の遠い延長線上にあるという実感はありました。事件のあった 1995 年というのは異常な出来事が重なった年です。1 月半ばに阪神大震災があり、高速道路が壊れたり、大火災が起こったりしたのですが、これは戦前の関東大震災以来の都市部での大災害であり、連日のようにその映像が報道されました。そして、3 月に地下鉄サリン事件です。5 月頃から幹部たちが逮捕され、教団内部の独特な世界観が次々と明らかになっていきました。当時はバブル崩壊後の不況の真っ只中で、あと少しで 20 世紀が終わるという世紀末です。終末思想、特にノストラダムスの予言はこの頃の子供たちにはかなりのリアリティがありました[27]。ちなみに『新世紀エヴァンゲリオン』[28]のアニメ放映が始まるのも、この年の秋です。だいぶ後になって初めて見たとき、共感するところはあまりなかったのですが、主人公と放映当時の自分の年齢が同じだったこともあり、その頃の世紀末が迫りくるという落ち着かなさ、不透明な未来への空恐ろしさといった感覚を懐かしく思い出しました。

オウム真理教についてですが、怖いという気持ちは勿論ありましたが、事件そのものより、教団の世界観を興味深く思いました。外務省や自治省など、国のような制度をつくり、それぞれに

---

[26] 1988–89 年、日本語版第一刷刊行、早川書房。『異教の女王』『宗主の妃』『牡鹿王』『円卓の騎士』の 4 部作。

[27] 2019 年 4 月 7 日、フジテレビの番組で『ノストラダムスの予言』（1973 年、祥伝社）の著者、五島勉が、子供たちも読むとは思っていなかった、子供たちには謝りたいと、取材に答えていたことが、話題になりました。

[28] 監督・脚本 庵野秀明など。制作 GAINAX。放映 テレビ東京系列。

大臣がいたり、サティアンやアーチャリーなど、自分では絶対に思いつかないような不可思議な響きの単語が固有名詞として使われていたりしました。当時はサンスクリット語とは知らなかったので、今でも、仏教やヒンドゥーの用語として出会うと、その意味に思いを致すというより、オウム真理教のことを思い出してしまいます。

最後に、2020 年に公開された『ミッドサマー』[29]という映画についてです。主人公は家族を突然、亡くしています。スウェーデンからの留学生 1 人を含む、アメリカの大学院生 5 人が、留学生が育ったスウェーデンのコミューン「ホルガ」を訪れることから始まる物語です。このコミューンは北欧のペイガニズム[30]を基盤とする信仰に基づいており、今の基準でいうと、とりわけ死ぬことに関して残酷な風習が当たり前のこととして行われています。あらすじを記すことは避けますが、私は家族を悲劇的に失った孤独な女性が、カルト的なコミューンに人の「温かさ」を見出して、溶け込んでいく話のように思いました。象徴的なシーンが 2 つあります。1 つ目は、彼女がある衝撃的なシーンを見た時、共同体の女性たち十数人が一緒に体を震わせながら泣くシーンです。2 つ目は、ラストのシーンなのですが、ある人々の恐怖や絶望を共同体のメンバー一人ひとりが体で表現をしていました。どちらも共同体の人々が同じ動作をするのです。身体と身体が同調し合っていく感覚、共同体の中に飲み込まれていく感覚、それが辛い経験を負った彼女のカタルシスだったのではないでしょうか。

私が調査を続けているニューエイジやスピリチュアリティの領域では、現代社会が失ってしまった人と人とのつながりを回復しなくてはならないといわれることがよくあります。この映画では、そのような主張が極端な形で描き出されているとも言えます。

4　おわりに

文化人類学の民族誌は、ある意味、突飛な世界を描いています。私たちが、遠くであれ、近くであれ、異文化を調査しているからなのですが、その一方で、全くのフィクションの世界を描く人は少ないです。多くの読者を持つ作家となると、日本では『精霊の守り人』[31]で知られる上橋菜穂子ぐらいではないでしょうか。『ゲド戦記』[32]を書いたアーシュラ・K. ル=グウィンは父親が文化人類学者だったことで知られています。

有川浩は『県庁おもてなし課』[33]の巻末特別企画の鼎談の中で、勉強するつもりをもたずに専門知識を得られるのは小説の 1 つの効能だと述べています[34]。民族誌も、研究者以外の人々が、面白いと思えるほどのわかりやすさで描くことで、対象とする地域や人々を、より多くの人々に伝えることができるのではないでしょうか。

---

[29] 監督・脚本 アリ・アスター。製作 スクエア・ベグ、B リール・フィルムズ。アメリカでは、2019 年に公開。

[30] キリスト教が広がる前からヨーロッパにあったとされる信仰の総称。多神教かつ自然崇拝的だったとされます。

[31] 1996 年、初版刊行、偕成社。シリーズは、現在のところ全 13 作品。

[32] 1976 年、日本語版第一刷刊行、岩波書店。シリーズは全 6 作品。

[33] 2011 年、初版刊行、角川書店。

[34] pp. 441–442.

私たちの生きている世界は、もう 1 つ、あるいは複数の世界と重なり合っている、隣り合っているという視点は、いたるところに見られます。本稿で取り上げたものでいえば、グラストンベリーとアヴァロン[35]や、サグ（人間の世界）とナユグ（精霊の世界）[36]が挙げられます。民族誌を書くという行為は、フィールドという異世界と、読者が暮らす日常世界という 2 つの世界を取り結んでいるのかもしれません。

（本稿は、2020 年 10 月 17 日(土)にオンラインで開催された「エスノグラフィーとフィクション研究会」における発表をもとに、加筆修正したものです。）

[35] ケルト伝説で、アーサー王をはじめとする人々が復活の時を待つアヴァロン島は、現実世界ではグラストンベリーと重なり合うといわれています。
[36] 『精霊の守り人』より。